

カナウラマチ 金浦町 金澤の舊町名。椿原神社の下から田井口の町端までを、俗に出町と呼び、田井の村地を相對請地とした箇所であつた。文政四年二月是等郡地の部分を町奉行の裁許とし、金浦町と稱した。金浦は此の邊の郷名である。明治四年四月戸籍編成の時この町名を廢して天神町一丁目とし、十二年郡地を離れて普通の町地となつた。

カナウラロキヨウ 金浦鷺橋 金澤の俳人。名は齡。甘外の子。俳諧を青年に學んで、閑亭五代を稱し、明治の後泉野菅原神社の社掌となり、同十三年三月一日六十六歳で歿した。

カナガサキガタ 金ヶ崎潟 鹿島郡大津に在る。もと入江で、その面積亦頗る大であつたことは、天保九年十二月六日大津村領入海水淺の所七萬歩を埋立てる爲、土砂を白濱村に取ることを許されたとの記録があるによつても知られる。後亦その排水口を横斷して道路を通ずるに及び、自ら海湖の侵入を妨げて淡水となるに至つた。一に深見潟ともいふ。

カナガサキシミヅ 金ヶ崎清水 鹿島郡大津と白濱領境の海際にある。能登名跡志に、『出鶴濱往來に、金ヶ崎といふに冷水あり。此崎の海中に、手にとられぬ金見ゆることありし故に名とすと云へり。』と記する。

カナガン 觀音下 能美郡輕海郷に屬する部落。郷村名義抄に、邑名はこの村嶺山に窟があつて千手觀音の堂があるからだとの。蓋し元來カナガンと稱する地名があつたのに、觀音下の文字を當てたものである。

カナガソイシ 觀音下石 能美郡觀音下に産する石材。石英粗面岩質凝灰岩で、黄色を帯び、質全く粗面で稍硬い。

カナカハゴマドウ 鍊川護學堂 ↓ホウセ 寶泉寺(鳳至)。

カナカハジ 鍊川寺 鳳至郡道下鍊川明神の社僧で、永祿三年・天正七年等の文書に鍊川寺衆徒と見える。その鍊川寺は數坊あつたものゝ數名であるが、戰亂の世に追々廢絶して寶泉寺のみ残した。

カナカハミヤキ 金川宮記 一冊。鳳至郡道下鍊川明神の緣起である。同郡馬場村に住した醫師伊東某が享保十年に撰んだと書いてある。當社を式内石瀨比古神社であると書いてゐるが、それは誤であらう。

カナカハミヨウジン 鍊川明神 鳳至郡道下に在つた。社名は宮の前に在る小流から起る。この鍊川明神のことを、式内等舊社記に羽咋郡なる式内諸岡比古神社の遺である如く言ふものは誤であらう。↓モロカヒコジン ジャ 諸岡比古神社(鳳至)。

カナクサリガハ 金腐川 源を河北郡戸室山の西北麓から發し、西北に流れて小二又・牧・傳燈寺・長屋を横ぎり、金腐橋に於いて金澤の郊端を過ぎ、下流千田を経て河北濁に入る。流程一八軒。金腐川より上流は長屋川の名があり、金腐川は又古く金くらひ川と記したものである。

カナクサリバシ 金腐橋 金澤に在つて、金鎖橋とも書く。金澤橋梁記に、『かなくさり橋、大槓に有之』とあり、正保四年幕府へ進達に加能越三州道程調帳に、金クサリ川橋と記載されてあるから、川名を以て橋名としたものであらう。

カナクビジヨウ 金頸城 鹿島郡能登島に在つた。得田文書文和二年九月得田章房申單

忠狀に、桃井兵庫助並びに長新左衛門胤連以下凶徒退治の爲、去八月廿八日大將吉見修理亮が能登島に發向の時、章房はその手に屬し、廿九日胤連の館を燒拂うて金頸城に追籠めたとある。

カナクラ 金藏 鳳至郡下町野郷に屬する部落。能登名跡志に『川西より鈴屋へ行くには、櫻木といふ渡舟あり。此渡しより山手へ行けば金藏村なり。金藏寺とて眞言宗あり。』と記する。

カナクラジ 金藏寺 鳳至郡金藏に在つて、眞言宗に屬する。山號は岩倉山。能登名跡志に『金藏村の金藏寺は白雉年中の開基にて、昔は七堂伽藍にて八坊あり。今の金藏寺は、白山宮の別當松智院といふ。三町野郷十四ヶ寺の内にて、今も大寺なり。』と見える。寺藏の木造不動明王座像體高二米二七は護摩堂の本尊で、その頭胸腹部は平安時代の作、他は寛保三年十二月金澤今町佛師山要人の後補である。

カナクラシラヤマジンジャ 金藏白山神社 鳳至郡金藏に在つた。式内等舊社記に、『金藏白山神社。町野郷金藏村。別當所號金藏寺。舊社也。』とある。

カナクラヒガハ かなくらひ川 ↓カナクサリガハ 金腐川。

カナクラヒバシ 金くらひ橋 石川郡市川にある。龜尾記に、此の川は手取川の分水で、橋下に磁石があり、往來の者の灯を取るといひ、又この橋に鐵釘を用ひれば一夜にして抜取られるといふので使用せぬとある。

カナザハ 金澤 (一)聚落の成立一初め本願寺蓮如の北國を巡錫した頃から、加賀には

次第に一向宗信仰の徒を加へたが、延徳中實如の時に至つて、金澤御坊が起り、漸く殷盛を加へて都市の狀を呈するに至つた。天正八年佐久間盛政が信長の命を受けて之を陥れるや、寺地を居城とし、坊舎を居館に當てたが、十一年前田利家の之に代るに及び、城郭の礎、殿舎の壯日と共に加り、士民醫集して百貨幅濶の巷になつた。

(一)位置—金澤の位置は、犀川・淺野川が溪谷を離れて將に平野に出んとする所に在り、丘陵を負ひ郊野に面し、封建侯伯の城郭を構へる爲地形の妙を得てゐるのみならず、加賀平野の殆ど中央にあるから、經濟上諸種の利便を兼ね、陸は北陸道を通ぜしめ、海は外港宮腰(今金石)によつて上國に交通することができる。金澤が裏日本に偏在するに拘らずその大を致したのは、主として百萬堀封の城地として選定せられた爲であるが、亦地理上相當に優秀の位置であるからでもある。

(二)名義—金澤の名は金洗澤の中略から出たとする説が古來行はれてゐた。これは芋掘藤五郎の傳説に基づくもので、全く信じ難い。(四)初見—文獻に於ける金澤の名の初見は、越登賀三州志に、文治三年加賀の土井上左衛門の從士に金澤源次のあつたことを擧げるが、これは偽書盛長私記によるものであるから引證すべき限でない。同書にまた、天正某年卯月朔日附で、本願寺の家室下圍侍從頼純から堀五兵衛に與へた感狀に『於金澤首一討取』とあるを引くが、これも金津(越前)の書寫の謬らしい。同書に又天正五年上杉謙信の加賀に入った時陣傍萬里と共に茶臼山に登つた時、萬里が『君祈萬里—白山社。臣守四方—